

高3「文学国語」の授業で、梶井基次郎の『檸檬』を学習しました。



『檸檬』は「えたいの知れない不吉な塊」を心の中に抱えながら町を歩く「私」が、一つのレモンを手にしたことをきっかけに気持ちが変わってゆく様子を描いた小説です。小説の結末で「私」はレモンを爆弾に見立て、丸善（輸入雑貨屋兼書店）に置いたままそこを立ち去ります。



この日の授業は、課題による本文のまとめと記述練習を兼ねて、自分の考えを書く時間です。課題はふたつ。

①『檸檬』の結末をあなたはどのように解釈しますか。

②「私」にとって檸檬は何だったのでしょうか。

どちらかの「問い」を自分で選び、200字で自分の考えを述べます。『檸檬』は主人公の複雑な心境を描いた、やや硬質な文章ですが、どの生徒も真剣に考え、言葉を選び、すぐれた意見がたくさん出てきました。（中には教員の側がはっとするような意見もありました。）以下に、生徒の書いたものを一部紹介します。

- ・「私」にとって檸檬は病気や神経衰弱を快方に向かわせる精神薬のようなものであったと考える。「私」は檸檬について熱心に想像し、行動することで、自分の神経衰弱を紛れさせ、忘れようとしているのではないか。
- ・ふと考えたときに、「私」にとっての幸福はこの重さなのかと気づいたと思う。だから、丸善に行って自分に憂鬱をもたらす画本の上に「私」にとって幸福をもたらすものを置いた。檸檬は「私」にとって一時期の幸福をもたらす、はかないものだと思う。
- ・「私」がよほど丸善が象徴している高価で美しいものが嫌いで、自分の世界からなくなればよいと思っていることが分かる。また、その後京極へ向かうことで、「私」が自分の好きなものをこれからも追い求めていくことを読者に想像させている。
- ・「私」の想像力によって丸善は爆発したことになり、心を重くさせるものがなくなったと考えられる。しかし、「私」の好きなものは昔のものに戻ることはなく、病気も治ら

ないだろう。

- ・「私」にとって檸檬とは、みずぼらしいものであったと同時に心の安定剤だったのではないか。檸檬の形はきれいな球形ではないけれども、鮮やかな黄色であることなど、みずぼらしいが美しい。そういうところが、「私」にとって一番しっくりきたのだと思った。

生徒たちはお互いに意見を読み合い、共有することによって、より一層読解が深まりました。



授業では写真や図を多様し、視覚的な理解の助けにします。上の写真は、本文に登場する「ロココ趣味の香水瓶」の写真です。